令和５年度　第１回　市川市地域ケア推進会議　会議録

１．開催日時

令和５年７月２７日（木）　18 時 00 分～19 時 30 分

２．開催場所

市川市役所第１庁舎５階 第１委員会室

３．出席者

【委員】

山下会長、越田委員、大野委員、橋本委員、松本委員、秋本委員、岸田委員、山本委員、鎌形委員、菊田委員、篠原委員、水野委員、牧野委員、横山委員

（欠席者１名）

【市川市】

奥野地域包括支援課長、ほか

４．傍聴者

０名

５．議事

（１）前回会議の振り返り
（２）高齢者の「居場所」について
（３）居場所に対する方針（案）
（４）意見交換
（５）次回会議に向けて

６．配布資料

・資料１　　：令和５年度第１回開催通知
・資料２　　：令和５年度第１回会議次第
・資料３　　：令和５年度第１回地域ケア推進会議資料

（会議当日配布資料）

・資料４－１：市川市地域ケア推進会議委員名簿
・資料４－２：「きょういくところ」チラシ
・資料４－３：「いちかわ支え合いネット」チラシ
・資料４－４：「市公式 LINE」情報配信サービス　チラシ
・資料４－５：「いちわかプログラム」チラシ

７．議事録

（午前 18 時 00 分開会）

発言者	発　言　内　容
山下会長	議題（1）前回の振り返りから議題（３）居場所に対する方針案について事務局から説明をお願いします。
事務局	**議題（１）前回の振り返り** ３月に開催した前回の会議では、地域ケア会議の課題の吸い上げから、今年度のテーマを「居場所」としました。三つの事例を紹介し、居場所のニーズに対する意見交換を行いました。主なご意見は、資料の通りです。ご意見を踏まえ、居場所について考えましたので、改めてご報告させていただければと思います。（資料３　１～４ページ） **議題（２）高齢者の「居場所」について** 居場所とは、気兼ねなく自分を開放してくつろげる場所、自分がそこにいることが誰からも認められている場所を指します。踏み込んだ概念として、サロンや通いの場があり、国が通いの場の類型に示すとおり、近年はその範囲を幅広くとらえる傾向にあります。 また前回、山下会長からサードプレイスの概念を提示いただきました。自宅や職場とは別の居心地のよい第３の場所を指し、1人でゆったり過ごすよさもありますが、誰でも気軽に参加でき、交流できる場所であることが、サードプレイスの魅力であると考えられます。（資料３　５～７ページ） こうした居場所の考え方を踏まえ、地域ケア会議で居場所がテーマとなった事例を再点検しました。結果、居場所のニーズを確認し、居場所の持つ力によって、高齢者の方の心と体の健康を保っていただきたいという考えを改めて認識しました。（資料３　８～１２ページ） 居場所の課題を検討することを目的として、タイプ０からタイプ３までのカテゴリーに市川市の居場所を分類したところ、すでに多様な居場所があると言えます。（資料３　１３～１４ページ） 多様な居場所があることを踏まえ、本人に合った場所へ行けるよう、サポートが必要と考えました。（資料３　１５～１６ページ）

	議題（３）居場所に対する方針（案）
事務局	興味関心に応じた居場所は地域に数多くあるので、アクセスを向上することが重要となります。 方針の第１「居場所の情報や案内」について、市で取り組んでいることをいくつかご紹介したいと思います。 ・「きょういくところ」 ・「いちかわ支え合いネット」 ・市公式LINEによる配信 ・生活支援コーディネーターの配置 また、「いちわかプログラム」は、３ヶ月間のサービス終了後の社会参加などの活動的な生活の継続を支援する取り組みとなっており、居場所につなぐ支援の一部と考えております。（資料３　１７～１８ページ） 方針案第２「移動の支援」について、バスやタクシー等の交通機関による移動の支援は、現在検討しているところです。 一方で、交通機関を使う距離ではないけれど、歩行の不安定などにより付き添いによる移動支援を必要としている方もあり、効果的な方法がないかと悩んでいます。 方針案第３「参加のきっかけ」について、居場所に行きたいと思っていても、知り合いがいなかったり、気後れしてしまう方に対しては、ちょっとした声かけやお誘いがあれば効果的ではないかと思われますが、こちらも悩んでいるところです。（資料３　１９～２０ページ）
	議題（４）意見交換
山下会長	議題(1)から(3)までの説明を踏まえて、居場所へのアクセス向上のため、皆様が所属団体で最近取り組んだことやできそうなことなどを教えていただければと思います。
横山委員	質問ですが、前回会議の振り返りにある、“本人の希望というより介護者の負担軽減が目的”とは、いわゆるプラスの方で見たのかマイナスの方に見たのか、どういう流れでこの話が出たのでしょうか。
事務局	前回の振り返りをさせていただきますと、三つの事例の中で、“本当にご本人が行きたいと言ったところなのか、ご家族がレスパイトのために望んでいるのではないか”というご意見をいただいたところです。

横山委員	わかりました。やはり本人の意向確認が不十分という部分をもっと考えようという流れであったと認識しており、介護者の負担軽減の方がメインテーマでは困ると思っていましたので、問題ないです。
大野委員	市で、いろいろなことに取り組まれているのだな、というのが素直な感想です。それでも足りないものがあるのかと思いました。サードプレイスについて、あまり人と接しなくても心地よい場所というのは本当に大切だと思っており、それを踏まえた上で、居場所や通いの場の分類はタイプ０まである。さらに、タイプー1 もあるのではないかと思います。住民同士からはじまったようなつながりで、ご近所さんと挨拶したりショッピングセンターで知り合いになってという方もいれば、なるべく会わないように、挨拶をしないという方も結構いると思っており、逆にこのサードプレイスにも、カフェやクラブや公園という、顔なじみがいなくても、ただいるだけの場所があってもいいかなと思います。それが、夏場であればエアコンがない家や、出かけたいけど暑くて公園もいられないのであれば、エアコンが効いている店舗で涼んでいってくださいといったような、誰ともしゃべらなくてもいいようなところがあってもいいかなと思いました。
山下会長	ありがとうございました。意見交換と質問を繰り返した方がいいので、団体の取り組みは後にまわします。もう少しご質問等意見交換をお願いします。越田委員お願いします。
越田委員	どちらかというと我々医師会の活動は、特に高齢者に関しては、日常の病気を見るという診療以外に、在宅医療で患者さんのところへ行くということにかなり重点を置いています。当然ながら、要支援１の方から要介護５の方までいて、要介護３、４、５の方は、外に出るのもままならないものですから、そもそも居場所も家しかないのです。しかし、要支援１や２とか結構若い方というのは、比較的自立した生活を送られてる方が多く、その方が、誰かに「こんないい所があるよ」と言われても、結局は、自分の意思で行く行かないということになるので、そこでタイプ０があるわけです。例えば、私もスポーツクラブに行きますけど、日中や昼休みに行くと高齢者が多く、そこでお友達を作って楽しんでおられます。自分の意思で行ってるわけです。 居場所の話が出たときに、前回の会議で私は、家が居場所になるのではないかということを話しました。やはり我々医師会が見てるような患者さんというのは比較的家が居場所になる方が多いです。 例えば、地元でやっている「きょういくところ」に類するものは、私も地元の自治会の回覧で回ってくる。我々の立場からすると、医療を続けて長生きしていただけるというのが一番なんです。デイサービスに行ったら

越田委員	麻雀をやって楽しかったとか、最初は嫌だったけど、行ったらお友達ができましたとか。多分繋がらなければ行くのが苦痛でやめたいってなると思います。 　出発点として、居場所が本当に必要かどうかということと、それが強制的になってないか、家族が行って来いと言うから仕方なく行くとか。その辺りの整合性やバランスがとれていないと、宝の持ち腐れになるわけです。 　我々医師会からは直接、介護面や患者さんの趣味やプライベートなど、一人一人の患者さんと個人的につき合って、外来で聞いたら、こんなのあったらどうかという話しはできるかもしれません。しかし、団体としてこれを積極的にやるのがなかなか難しい部分があります。 　その理由は、我々では患者さんのニーズや思ってることを見つけるのは難しいということ、それをどうすればいいのか。それぞれ個人の考えもあるでしょうし、いろんな生きざまもありその辺は難しいのではないかと考えてます。 　話は戻りますが、決して「意味がない」と言っているのではなくて、我々が接してる方たちは、“居場所は家が良い”という人が多いということです。
山下会長	各団体によって居場所との向き合い方や捉え方が様々だと思います。 　前回のことも引き継ぎながら、また各団体で、各委員の個人的な意義も含めてもう少しお聞きしたいところです。
牧野委員	薬局だとどうしても受け身のところがあります。薬剤師会としてかかりつけ薬剤師というのがあって、患者さんとの繋がりができて、何も用事がなくても薬局に来てくれる。自分ではないですが、何気ない相談として、おばあちゃんが携帯の使い方がわからなくて薬局に来たりとか、血圧計も置いているので、電池交換をしてほしいとか。人によっては、薬局も居場所になっていると思います。 　自分も越田委員同様、自宅が居場所というイメージがありますが、前回のサードプレイスの話をお聞きして、意外に薬局もなりうるのかなと考えています。かかりつけ薬剤師という制度を推奨していますので、そこをうまく活用し、薬局自体の業務もあり難しいところではありますが、そういう取り組みもあり得るのではないかと、個人的には思ってます。
山下会長	ありがとうございます。他、いかがでしょうか。
大野委員	例えばデイサービスを勧める時に、「それは年寄りが行くようなところ」と高齢者の方がおっしゃるのですが、きょういくところの「シニア」

大野委員	という文字に引っかかる方もいるのかなと思います。年金の支給開始が引き上げられ仕事をしている方も多く、この時間帯に家にいるのかも疑問に思いました。 　夜、仕事が終わって７時以降にスーパーに行くと、シルバーカーを使っている世代の方がお買い物に来ています。別にシニアという枠に区切らず、若い人とも交流しながら、遅い時間の仕事が終わってからの交流会があってもいいと思いました。
山下会長	活動を推進している団体の方は今日いらっしゃるんですか。
山本委員	社会福祉協議会の山本です。「てるぼサロン」が「きょういくところ」に掲載されています。市内 111 箇所、地域の皆さんで運営されています。情報をまとめていただき、非常に助かっています。初めは、様子を伺っていましたが、行徳支所のリーフレットはすぐになくなり、皆さんかなり関心を持っていると思います。「てるぼサロン」は、意図的に作る地域の井戸端みたいなところです。ここだけで十分とは思っていませんが、一定の役割はあると思っています。コロナで休んでいた時期が多かったですが、７、８割ぐらいまで戻ってきています。休止しているところも若干ありますが、働きかけをしているところです。
篠原委員	生活協同組合は宅配と店舗事業等を市内で展開していますが、組合員活動の中で、「みらいひろば」という名称で居場所づくりも展開しています。組合員の方はもちろん市民の方も参加できるような居場所を、地域の皆さんと一緒に作り、市内３ヵ所で実施しています。基本的には高齢者という括りはなく多世代交流の場になっており、子育て中のお母さんも、シニアの方もいらっしゃいます。平日の午前中に開催しており、男性が通える場所になっているかは課題ですが、地域の誰かと繋がりたいという方や、おしゃべりしたいという方に「みらいひろば」を知っていただくため、カタログにチラシを入れたり店舗に置いたりして、周知を進めています。 　ご意見の中にあった、病気だったり身体的な理由で家から出られない方については、我々の組合員活動の中で、そうした方までフォローできるか難しい部分がありますが、まだまだお元気で地域と繋がりたいという思いを持っている方に、気軽な気持ちで来ていただきたいと思います。どちらかというと、孤立化する前の段階の元気なうちに繋がりを作っておきませんか、というアプローチです。 　居場所というものを、それぞれの身体的状況やご家族の状況に応じて、その方が選べる幅を広くつくっておくことが大事なポイントではないかと考え我々も組合活動を進めております。

篠原委員	今日教えていただいた支え合いネットに紹介いただいたり、まだＰＲが足りてない部分もありますので、いろいろな世代の方が交流できる場、そういった機会を用意して自由に選択することができるように、情報収集をもっと強化していきたいと考えております。
岸田委員	市川市自治会連合協議会です。 町会自治会には、毎月、行政側が行う行事等のＰＲ、回覧用の資料は回ってきますが、「きょういくところ」は、町会自治会宛にきたことはないです。毎月、地域振興課から各町会自治会宛てに配布する資料に組み込んでもらうと、より市民に広がるかと思いますので、町会自治会を頼ってもらえればと思っています。
横山委員	最初に言い忘れましたが、この資料は、前回よりも良くできていると思います。特に良いと思ったのは、居場所の課題整理のところで、対象者を少し絞っているところです。先ほど越田先生もおっしゃってましたが、医療や介護で関わってる患者さんは、デイサービスやデイケアに行っていた人はそこが居場所になっていて、そこから先になかなか繋がらないという状況があります。一方で、大野委員もおっしゃってましたが、地域住民は、人によっては居場所を探しており、ショッピングモールに１日中いたり、公民館で涼んでいる人たちもいます。「きょういくところ」は、活用できるので、自治町会やショッピングモールなどに置いて、もっと活用してもらいたいと思っています。 話は戻りますが、「いちわかプログラム」の説明がやや足りていないと感じました。「いちわかプログラム」には、昨年度、市川市のリハビリ専門職と一緒に取り組みましたが、いわゆる医療や介護のサービスと並列ではなく、フレイルになりかけてる人たちがプログラムを卒業して、その後はセルフマネジメントをしていくという仕組みです。これまでは、デイサービスやデイケアにつなげてたところを、あえて“離して”いくための仕組みなので、こういったことを、対象者だけでなくて、医療介護の専門職やケアマネジャーに共有して、進めていきたいと思います。 市川市の事業で住民主体の通いの場に行ったり、「はつらつシニア応援講座」に行ってフレイル予防の話をするのですが、自分が今後どうやって運動したらいいのか、人によっては公民館の場所がわからないなどの質問が出てきます。そういった人達に対して、先ず繋げやすい人たちからアプローチしていくというのは、効果的だと思っており、この８月に開催の「シニア応援講座」でも「きょういくところ」の資料を配りますので、リハビリテーション協議会として関わっていけると思っています。今のような話や、先程の「いちわかプログラム」の話を、多職種に伝える場ができたらいいと思ってます。

横山委員	もう１つ「移動支援」について、リハビリ専門職も含めて、訪問介護を頼った移動の手段というのを、そろそろやめられないかと思っています。日本以外の国では、歩かない人たちも増えています。いわゆる電動車椅子で行くのが当たり前で、短い距離でも歩くのがやっとの障がい者が増えてきており、逆に、車より早い電動車椅子を利用している状況だったりします。市内の道路で電動車椅子が走ったら、多分車からのクレームが来るので大変かもしれませんし、電動車椅子を買ったら管理の問題が大変などはありますが、別の視点も考えてもいいのではないかと思います。この辺の啓発は私どもの仕事なので、伝えられればと思ってます。
越田委員	下総中山は、市川で高齢化率が一番高いところと言われていて、病院に来るのは高齢の患者です。地元にいくつか老人会があり、老人会の方から行っているイベントのお知らせを病院に貼っていいかと聞かれることがあります。「どうぞ貼ってください」とお伝えしますが、やはり病院に来て待合室にいながら、いろんな情報が欲しいという人も当然いるので、こういった情報を診療所とかに積極的に置いていただいて、病院から情報発信をしていければと思います。 今まで、ひとりで元気だったけれど、家から出なくなってしまって、自分の老後を悲観して鬱になる人もいます。認知症になっているわけではないのですが、「もう自分は死ぬんだ」ということを言い続けて帰っていきます。そういう方は、何もやることがなく、何をしたらいいかわからないのです。そのような人も対象になると思ったときに、診療所を紹介できるスペースの一つとして、ケアマネジャーに共有して患者さんに発信したらいいと思います。
大野委員	越田先生がおっしゃったように、ケアマネジャーは情報は集めておき、活用できるよう支援の引き出しの中に入れています。
越田委員	認知症の患者さんをみんなで見つけましょうという取り組みをしたときに、例えば床屋さんで客の会話がおかしければ気づくように、初期症状を発見するには専門の人たちだけでなく、町の人たちの協力を仰ぎましょうという話は必ず出てきます。高齢者が多く集まるようなところ、例えば、スポーツクラブに置いてもいいかもしれないですが、そういう方法も含めて、もう少し周知をしたら良いのではないかと思いました。
大野委員	横山委員がおっしゃっていたシニアカーを、まさにうちの父親に勧めています。86 歳になって、まだ車の運転もできますが、何があるかわからないのと、シニアカーがあれば買い物にも行けるということで勧めています。ただ、実家が新潟で道路が広いのですが、私が担当している市川市内

大野委員	の歩道では無理です。市川市内だと車道に出る必要があったり、ご家族が皆さんに迷惑をかけるのではないかと止めることがあります。海外のように広い田舎では利用可能ですが、地域性があるのかなと思います。 　質問ですが、介護サービスを使うと利用料が発生しますが、「いちわかプログラム」はなぜ無料でできるのでしょうか。
山下会長	説明は事務局からお願いします。
地域包括支援課	「いちわかプログラム」は総合事業の中で、市独自で地域の実情に応じてサービスを提供できる枠のため、無料で利用できます。このサービスは他の通所サービスと違い、有期限の３ヶ月で終わるというものです。３ヶ月の中で、フレイル状態になってきた方は戻れる可能性があるというところをポイントとして、できるだけ元の生活に戻るという試行期間ととらえています。ただ３ヶ月間が終わった後に、やはり一定数は元の生活に戻れないで、通常の利用料金が発生するサービスを使われる方もいると思います。通常の通所サービスといちわかプログラムは併用はできないというところがポイントかと思います。
大野委員	市の総合事業なので単価設定も市が決めることができ、有期限ということですね。わかりました。
山下会長	今までご意見を伺ってきましたが、これは地域ケア推進会議の方針として公表されていくのか、私たちの意見というものがどのように方針の中に入っていくのか。居場所をテーマにして、今議論いただく中で、アクセスということに集中させることでいいのかというのが、少し進行しながら悩んでおりました。 　委員の皆様に、居場所へのアクセスについて、各団体や診療所含めて、取り組めそうなことを教えていただきました。家というのは日常的な居場所ですけれども、その他の居場所を日常的な居場所として感じられるのか非日常的なものなのか、という論点ですとか、その居場所が受け身なのか、主体的なのか。繰り返しになりますが、生活の一部の居場所のようなものなのか、人と人が繋がるきっかけとなる場所なのか、情報が入手できる場所なのか、おしゃべりに特化して交流するような場所なのか。居場所というもの自体をこの会議でどう取り扱っていくのかというところがもう少し明確にならないと、アクセスに絞って「きょういくところ」の活用方法の話になってしまいます。 　「いちわかプログラム」も含めて、こうした居場所づくりや居場所というものが、介護、生活支援に関連して存在しているということ自体を、先ずはこの会議で認識して、情報を整理、取りまとめたことを共有した方が

山下委員	いいかなというのが一つ目。 　二つ目が、越田委員がおっしゃった自宅は居場所かについて、居場所か居場所じゃないかというと居場所です。この会議で“社会的な居場所”を扱うときに、重度の医療が必要な方でも、それまでは近所づきあいがあったような方で自宅にいることが多くなったときに、ご自宅を開放してそこに人が集まってくることによって居場所ができたといったエピソードがありますので、市として地域包括ケア推進のなかで、社会的に孤立している状況を作らないという発信が重要と考えるのであれば、こうしたストーリーを組み込んだり、診療所や薬局などに、市川市で取り組んでいる居場所といったものの情報提供をおこなうことも考えられます。 　移動の話は、居場所の話の次のテーマになり得ることで、さらにその次は買い物というテーマも出てくるので、事務局の方で、そうしたことをテーマにしていく。カーシェアリングのような動きも一部始まっているそうですし、いろいろな取り組みを可能にしていくのが重要だと思っております。 　引き続き、ご意見を伺います。
鎌形委員	商工会議所の会員は商売している方が多く、時間がないため、なかなか趣味ができません。私も「きょういくところ」を見るまで、こんなに居場所があることを、全く知りませんでした。 　主人が亡くなってから、足腰が悪くなり転ぶようになったので、歩いていたら、たまたま鬼越の「いきいきセンター」を見つけました。覗いてみたら、皆さん楽しそうに歌やストレッチ体操をしており、普段の日は仕事で出られないので、日曜日を探して参加しました。おかげさまで、足腰は大分よくなったのですが、今年の４月に体操をやっていて、足を滑らして大腿骨を骨折してしまいました。それで今、杖をついて大分よくはなってはいますけど、若いときにこういう場所を知ってればと思いました。何十年って運動もやっていなかったものですから。行ってみて思ったことは、男性は全然来ていないです。応募では男女の区別はしていないのですが、やはり男性は来ませんね。 　もっとお話ができるところにパンフレットがあると、もう少し関心を持って見るのではないかと思います。私は１回も目にしませんでしたし、同じ鬼越に住んでいて知りませんでした。整形外科に行くとみんな膝が悪いとか、いっぱい来ています。もう 10 年も通っている方もいます。運動に切り換えなくては駄目だと思い、運動で筋肉をつけたら、今は平気で何でもなくなりました。ただ、この間、疲れているのに無理にしたために滑って大腿骨骨折してしまったので、疲れたときは休まなくではいけないと反省しております。 　ご商売をしている方は、自分の体を顧みることできなくて、足腰を悪く

鎌形委員	している方が多いです。ですから、こういうパンフレットが近くにあったら、通う人が出てくるのではないかと思います。
越田委員	かかりつけ医なので鎌形さんを存じ上げています。骨折で手術しても、こんなに復活が早い人なんて見たことないぐらいの方です。おっしゃる通り、元気な方はお仕事をされています。特に、お寺関係とか、90 歳でもお店に出てる方もたくさんいまして、多分その方たちは、仕事をしていることが居場所なのかもしれないですね。 鎌田さんが言うように、男性の方が引っ込み思案というのは、どこの世界でもあるのかもしれませんが、一人が好きっていう人が多いのかと思います。
鎌形委員	男性はどちらかというと、自分で何とかしようと思っている人が多いと思います。50 年後は、女性も働いて高齢になる時代で、女性も外に出なくなる可能性があるという話もありますが。今言った、交通のバスも１時間に１本で本当に少ないと思っています。
山下会長	交通の問題は必ずいろんな自治体で出てきます。 また新しい問いが出まして、働き続けるというのも重要ではないかという、これは事務局でどう整理しましょうか。 受け身的な居場所というものにしない方がいいという議論もあります。いくつかの研究で、居場所に通うことに意義を感じるか、活動に参加することに意義を感じるかというと、年齢が高くなるほど、運営のプロセスに参加していることによって、居場所と感じられるといった結果もあります。 もし居場所の担い手側に調査をしたら、担い手の高齢化により運営者が少ないという結果が出てくると思います。さらに、場所がない、費用がどうとか、プログラムを作るのが大変とか、地域の課題がいつも出てきます。居場所の維持にも課題があるというのが、よくあることです。 もう一つは、市川でもコロナの患者さんは増えてますか。
越田委員	増えています。毎日、５人中３人くらいです。
山下会長	私も先月初めてかかりましたが、治って驚いたのは、よっぽどインフルエンザの方が辛かった。とにかく高齢者に、もう１回外に出ようというきっかけを、市川市としてどのようにメッセージするのか。各団体の方が団体なりの協力体制をできる範囲にしてくださるってことが、ご意見だったので、当初の事務局の目的が果たせていると思いますが、この居場所に対する方針は、もう少しかっこよくした方がいいかもしれません。

山下委員	日本は居場所には許容しているところが多いので、もう１回、セルフマネジメントも含めて、居場所というものを大切にしていきましょう、参加していきましょうと言ったメッセージがあるといいと思います。 市独自の「いちわかプログラム」に注目してまして、もし団体の方等がご理解いただけるなら、特に医療機関の先生方が、居場所に関する相談を市民の方がされた際は、アドバイスするツールを持っているというか、この方針の中で、文言で共有をして、事務局が各団体と合意を取っていくというやり方もあるかもしれません。そうすると居場所の開発ということが出てきて、市民の中で居場所を作っていくという時に、市民だけが作るのではなくて市民と専門職が一緒に作っていくとか、居場所のプログラムを一緒に考えていくとか。 あまり万能型の居場所にはしないほうがいいと思います。目的を明確にした場所から多機能化を図るのは可能ですけど、最初はあまりゴールを書き残さない、理想形を押し付けない方が良いかと思います。 そうした意味では、先ほど鎌形委員がおっしゃっていた「男性はずっと家にいる」といった課題にメッセージを出すのも有効かもしれません。“男の料理教室”といったイベントは昔からやっていましたね。居場所があるという情報があると、ふらっと行ってみようかなとか、そこにはお酒があった方がいいかもしれませんし、同じように体験をした人がいるといいかもしれません。
水野委員	福祉公社はヘルパーの事業所なので、私達に何ができるかなと思うと、お誘いとか声掛けはできるかなと。先ほどの移動支援についても、確かに制度の縛りがあるのでできないところもあるかもしれませんが、何か私たちが対応していこうと思いました。 私たちは居場所の家に訪問するタイプなので、一緒にお誘いして、付き添いしてということが、ヘルパーよりも、インターンシップで受け入れている大学生に指導して、付き添いを今度やれるようになりましょうとか、きっかけづくりができるといいなと思いました。
山下会長	ありがとうございます。地域包括ケア推進の観点で申しますと、制度上のサービスのみが、その方と外部の繋がりという現状にはリスクがあるという発想に立っていまして、インフォーマルな家族や友人の繋がりがあればそれはいいのですが、それもない場合は、民間の非営利セクターやボランタリーセクターが、そういう方々に接近する資源となる。居場所がその役割を果たすのか、居場所にいざなうためのアウトリーチといいますか、ホームヘルパー以外に、近しい人を作っていくというところとするのか。 実は、治療を中断している患者さんというのが、今は結構多いようです。市川市の方ではないですが、診断されているけれど医療費が払えなく

山下会長	て受診していないという方が結構いらっしゃって、どうやって私たちが、精神科も含めてその診療というものに向き合うか。そうすると、インフォーマルセクターの市民が保健師につなぎ、そこから医療にどんどん繋がっていくといったことも重要だという視点がありまして、地域包括ケアがやはり重要だと思います。こうした、制度だけでは支えきれない福祉を、ぜひヘルパーさんと訪問介護事業所の間で共有してくださるとありがたいと思うところです。
菊田委員	シルバー人材センターは、皆さん仕事をしたい方が集まっているので、当然そこが居場所としては機能していると思います。長く仕事を務められた方はいいんですけど、80 歳を超えて、認知症状が進んできたかもと周りの人から言われて、辞められた後の方のケアというのは、今まで全然しておりません。結局その方たちが、その後どうなっているかということを、別に追ってもいませんし、そこは、すごく反省しているところです。 もしその居場所づくりを、その人たちにもご紹介することが可能であれば、やってあげるべきかな、というところです。仕事をして元気になっていただくってのが一番いいと思いますけれど、シルバー人材センターとしても重点的にもやっていかなくてはいけないというのは強く思っています。 仕事をしたいと思う方はご自身で来られるので、心配ない方だと思いますが、家族に行ってきなさいと言われている方は、やはりなかなか仕事につけないので、私たちが、一番大事にしたいのは、1 人ぼっちにならないように、今元気でいられるようにというところが先ず大事だと思っています。辞められた後の方たちのことを、もう少しケアできるような仕組みを取っていかないとという気はしました。
山下会長	非常に興味深い話を、ありがとうございました。 秋元委員、初めてですが、感想を含めてどうぞ。
秋元委員	やはり、越田先生と同じかなと。私も在宅診療するので、身動き取れない人が多く、そこが居場所になるのかなというので同じ考え方にはなってしまいます。 個人の意見からすると、居場所というのが時代とともに減ってきていると感じます。私が幼い頃は、外にいけば、銭湯の煙突が３本ぐらい見えました。その当時のおじいちゃんおばあちゃんからすれば、一つの居場所であったと思います。あとは、公園に行けば日曜の朝には絶対ゲートボールをしていたり、僕ら小学生と、居場所の取り合いをするぐらいの時代に育っていたので。そういう居場所自体も減ってきてるのは、ちょっと寂しい時代になったなと、この会議に参加して思いました。

秋元委員	あと駄菓子屋も減っているので、多分おじいちゃんおばあちゃんたちがひ孫を連れてショッピングモール行くと、とんでもない金額を払うことになると思うので、駄菓子屋に行けば安上がりです。そういうことが、またできる時代になってくれるといいなということを感じました。
松本委員	あまり難しく考えないで、定義よりも、どういうふうに活動をやっていくのかが大事かと思います。
山下会長	ありがとうございました。
橋本委員	介護保険事業者連絡協議会の橋本です。 二つの立場からなんですが、私たちはサービス事業者なので、介護が必要な人のためのサービスを提供してるところです。こういう情報を職員も知らないと思うので、サービス事業者にもこうした情報がうまく届くといいなと思っております。 もう一つの立場として、私の母親が 80 歳で北部圏域におりますが、この「きょういくところ」の資料を見て、二つの団体に行っております。今年度から行っていますけど、すごく感謝しています。どこで見つけたのかわかりませんが、この資料を見て電話をして行っています。ですので、すごく活用されているなと思いました。 先ほどお知らせの話にもありましたけど、いろいろな団体でこういう居場所を作っていると思うので、それがうまく一つにまとまって見やすいものができると、紹介やお知らせがしやすくなるのかなと思いました。
山下会長	どうもありがとうございました。時間になりました。 最後、松本委員がおっしゃったように、市民にこの方針を知る時はわかりやすく示し、定義とかには関係なく居場所を作っていくと言ったメッセージは重要かと思います。 一方で、第１回目の会議の際に、高齢者サポートセンターの方が出したケースというのは、居場所に繋がらないケース、高齢者サポートセンターの方が考えた居場所が必要なケースを出してくださったところです。そこと私たちの反応や感想というのが違っているので、もう少し意見を重ねていくことが、この居場所といったキーワード一つとっても重要だと思います。市川市の地域づくり、地域ケアを進めるにあたって、皆様方団体の方々と、高齢者サポートセンターや社会福祉協議会のコーディネーター等の方との意見交換や交流といったものは、進めた方がいいように思ったところです。 以上で、議題等は終了するという流れでよろしいでしょうか。 ありがとうございました。

山下会長	では次回に向けて、事務局より説明をお願いします。 **議題（５）次回会議に向けて**
笠原主幹	長時間にわたりまして、貴重なご意見また活発なご議論を大変ありがとうございました。 本日、私どもは居場所へのアクセス向上についてご議論いただくために準備を進めてきたわけではございますが、まだまだ居場所に関する定義ですとか、準備が不足していたことにつきまして、改めてお詫びをさせていただきます。 今回皆さんにご議論いただいた内容を整理させていただき、次回会議に向けた検討事項を各団体に別途依頼をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。 次の会議につきましては10月11日水曜日の午後を予定しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。また、ご多忙の折大変恐縮ではございますがご参加のほど、よろしくお願いいたします。
山下会長	議題は以上となりますので、令和５年度第１回市川市地域ケア推進会議終了いたします。

（19時30分閉会）